第４２回全国中学生人権作文コンテスト福島県大会

# 「差別が生んだ教訓」

福島大学附属中学校　３年　　齋藤　優衣

福島県に生まれた。この事実がある以上、震災を背負う必要がある。そしてこれには大きな意味がある。水俣から帰ってきて、強く感じた。

福島県の復興の実現に資するため、水俣病の災禍から環境都市へと復興を遂げた水俣市の中学生との交流を通して、福島県の課題と魅力を見つめる。故郷について深く考えることで、故郷の発展に寄与したい。この思いから、夏休み、そんな目的のサミットに参加した。

三泊四日の旅が始まる。新幹線、電車、飛行機･･･。数えきれない程の乗りかえをして、熊本県に向かった。見慣れない街の風景、遠く離れた地に住む中学生との出会い。全てが新鮮だった。そんな新鮮さを噛み占めているうちに、一日目があっという間に過ぎ去った。二日目は、水俣病について深く学ぶことができた。水俣病に関する知識は、社会の授業で、発生した年代と原因を少し学んだ程度で極めて浅はか。この状況で聞いた、水俣病を肌で感じ、当時の出来事を語り継ぐ語り部の方の講演や、水俣病の資料館で目にした事実には、非常に衝撃を受けると共に、福島県との共通の課題を見つけた。

約七十年前に発生した水俣病は、水俣市にある化学工場から流された、水銀を含む有害な工場排水により、魚が汚染されたことが始まり。やがて汚染された魚を口にした人々が、体調を崩し、水俣病患者となった。当時の様子や写真からは、悲惨さや人々の苦労、悲しみがうかがえた。中でも、偏見からなる差別の存在に関しては、非常に胸が痛んだ。水俣病の原因が不明で、詳しいことも解明されていなかった発生直後は、人から人へ感染すると誤解され、患者に対する差別が多く存在した。それだけではなく、工場周辺の地域に住んでいるという理由だけで、他の地域の人から差別されることも、稀ではなかったそうだ。これは、福島県にも重なる部分があると感じる。

「差別」。東日本大震災で、放射線の影響を受けた福島県民も、差別により災害で傷つけられた心をさらに抉られている。津波が原因となり発生した原子力発電所の事故で放出された放射線は、人体に悪影響を及ぼすとして、発電所の周辺の住民は避難を余儀なくされた。二歳で経験した震災。地震の揺れにただ怯えていたことだけを覚えている。避難指示の出されていない地域に住んでいたが、念のため、自宅から百キロメートル以上離れた地に一時的に避難した。

あれから十二年以上経過した今、報道を目にすると時折、当時震災による被害を受けた人々の心を癒やそうと、多くの国や地域から暖かい支援があったことが特集されている。その一方で、放射線への知識不足や、不安からくる福島県民への差別があったことも。水俣病の事例と類似し、当時は放射線が人を通して媒介するという誤解が生じていた。そして、差別が起こったのだ。

福島県ナンバーの車に石を投げつけられたり、避難先でいじめられたり･･･。たとえ患者、被災者であったとしても、同じ人権を持つ人間に変わりはないのに。

熊本県での三日目は、福島県、熊本県それぞれの未来に向けて班ごとに話し合いを行った。地域の魅力を伝えることや、正しい知識を普及させることについて。様々な意見を交わした。話し合いを終えて願うのは、これから先何があっても差別のない、平和な日常であってほしいということだ。

四日間の全行程を終えて帰ってきた故郷の福島県。その瞬間いつも以上に安らぎと安心を感じた。それと同時に、自分は福島県に生まれた事実に、一つ指名を与えられているのではないだろうか、と思った。

それは、福島県で何が起こったのか伝承していく使命だ。水俣市の中学生に、福島県のこと、震災のことについて聞かれた。正直しっかりと答えられなかった。故郷で何が起こったのか。きちんと把握し、県外の人に正しく伝えることができなければ、復興が進んでも、発展にまではつながらないと思う。そして、差別の教訓も、生かされないことだろう。一方で、伝えることができれば、理解を得られたり、偏見が解消されたりすると考える。

これから先、福島県を知らない人と接する機会も増えることだろう。そんな時、震災や福島県の魅力について、正しく伝えられる人間でありたい。忘れてはならない、差別の存在した事実も。伝えることで、より多くの人に人権について見つめ直し、考えてほしい。

水俣病や東日本大震災が残した教訓として、人権を尊重することの必要性が挙げられる。今までに例のない、恐怖を煽る出来事。今後そんな出来事があったとしても、人権の存在には何の関わりもない。差別や偏見が発生し、心を傷つける人が生まれるという、同じ岐路を絶対に踏まず、支え合いと思いやりの絶えない社会の実現を大きく願う。